

【研究ノート】

ネル・ノディングズのケアリング論についての一考察  
—「行い」と「関与」に着目して—

A study on caring of Nel Noddings:  
Focusing on 'act' and 'commitment'

深谷友里香\*

FUKAYA, Yurika\*

要旨

本研究ノートでは、今日さまざまな分野で重要視されはじめているケアに注目し、ケアを教育の分野で展開した教育哲学者、ネル・ノディングズのケアリング論に着目する。まず、ケアリングを成立させる要件とケアリングの基本的な諸要素であるケアするひととケアされるひとの意識状態の特徴を明らかにした。次に、彼女が述べているケアリングを成立させる要件から、ケアリングにおける「行い」(act)に焦点をあて、それに関連した「関与」(commitment)という言葉を出して、この二つの言葉の様態について考察した。その結果、「行い」はケアリングにおける目に見えるケアの行為を意味し、「関与」はその目に見える行為を越えたケアリングの内面に目を向けたものを意味することが明らかになった。本研究の残された課題は、「行い」と「関与」の具体的な要素を描出するには至らなかった点である。それらが明らかになるならば、教育における「行い」や「関与」といった行為の具体的な示唆が得られるように思われる。

はじめに

近年、ケアという言葉がさまざまな分野や領域で注目されてきている。その代表的な例として、介護や看護といった分野があげられる。それに加えて、教育や保育といった分野がケアを重要視しはじめ、今日においてもなお、ケアをめぐる活発な議論がなされている。こうした議論には、ケアの形はさまざまであり、またその対象も状況によって異なるという見解がある。たとえば、医療や看護の分野では、医者と患者という関係の中で、患者の身体的な「世話」を行うことをケアと称してきた。しかしながら、「世話」と一口にいても、この「世話」のやり方はさまざまであり、患者が変われば、その患者の実態に応じてやり方も変化する。それゆえ、ケアには、絶対的なきまりややり方は存在しない。このことから、ケアは多様であるということが出来る。

ここでケアという言葉に目を向けると、今日、私たちが耳目にするケアは、一般的に、世話や介護、気遣いなどといった意味で用いられることが多い。たとえば、メンタルケアやケアマネージャーといった言葉のケアは、気遣いや介護といった意味合いが強い。実際、広辞苑において、ケアの意味は介護、世話、手入れ、と定義づけられている<sup>1</sup>。とはいえ、ケアという言葉は日常生活にお

いて頻繁に使われ、私たちにとって比較的馴染みのある言葉である反面、安易に使われがちでもある。そのため、ケアの利点である多様性が見方を変えれば、ケアの本質を見えづらくしていることもまた事実なのである。ケアが注目されている今だからこそ、慎重にケアをめぐる状況を考察していかなくてはならないのではないであろうか。

このことにアプローチするため、ケア論で著名な人物の一人であるアメリカの教育哲学者、ネル・ノディングズ(Nel Noddings 1929-)のケアリング論に着目する。彼女は、ケア論の先駆者であるミルトン・メイヤーロフ(Milton Mayeroff 1925-1979)やキャロル・ギリガン(Carol Gilligan 1936-)の影響を受けながら、教育におけるケア論を展開した。その中で彼女は、ケアすること、ケアされることをケアリングという言葉を用いて、ケアリングの根本的な意味を関係性であると捉えている。その上で、彼女はケアリングの基本的な諸要素であるケアするひととケアされるひとの意識状態の特徴やその両者に役割があるということを述べている。

本研究ノートでは、ノディングズのケアリング論を取り上げ、ケアリング論の基本的な概念を整理し、ケアリング論の基本的枠組みを明らかにする。そして、そのケ

\* 武庫川女子大学大学院文学研究科教育学専攻院生 (Postgraduate student, Mukogawa Women's University Graduate school of education)

アリング論において重要な観点の一つ、すなわち「行い」と「関与」の言葉が有している様態について考察する。「行い」と「関与」を取り上げる理由は、彼女がいくつかの著書の中で、「行い」を意識的に捉えようとしているからである。また、「関与」という言葉は、ケアリング論の鍵概念として用いられることはないものの、観察できる「行い」を越える「関与」について述べられているからである。これらのことを明らかにすることによって、ケアリングにおける行為の具体的な手がかりを得ることができるように思われる。

### 1. ケアリングの成立要件—「出会い」・「貢献」—

ケアすることとケアされることは根本的な人間のニーズである。私たちは誰もが他のひとからケアされる必要がある。<sup>2</sup>

ノディングズは『学校におけるケアの挑戦』(1992)において、ケアについてこのような簡潔かつ重要な言葉から語り始め、読者をケアの世界に誘っていく。彼女によれば、私たちはさまざまな場面において、ケアを必要としている。たとえば、幼いときや病気のときなど、さまざまな場面すべてにおいて、私たちはひととしてケアを必要としている。ここでのケアは、理解され、受け容れられ、尊敬され、認められることが必要である、という広義の意味のケアを指している<sup>3</sup>。「はじめに」でも述べたように、ケアという言葉は多様に用いられているがゆえに、その本質が見えづらい。しかし、ノディングズはケアリング論において、上述した広義の意味でケアを用いることもあるが、ここで注目したいのは、ケアリングの根本的な意味を関係性と捉えていることである。その関係性について彼女は以下のように説明している。

ケアリングの関係は、その最も基本的な形において、二人の人間、つまりケアするひと (carer) とケアされるひと (cared-for) との間のつながり、あるいは出会い (encounter) である。その関係がケアリングと呼ぶにふさわしいものであるためには、両者が独特なやり方で貢献し (contribute) なければならない。<sup>4</sup>

ここでノディングズは、ケアリングというものは、ひととひととの関係性であるということ的前提とし<sup>5</sup>、その最も基本的な形がケアするひと (one-caring)<sup>6</sup>とケアされるひと (cared-for) とのつながりや出会いである、と言明しているのである。そして、それがケアリングと呼ばれるためには、両者が各々に独特なやり方で貢献しなくてはならないというのである。ここで明らかなことは、

ひととひとの単なるつながりや出会いという意味での関係では、ケアリングは成立し得ないということである。いいかえれば、各々固有の貢献の存在があってはじめてケアリングという関係が充足されるということであろう。

しかしながら、なぜノディングズは関係性としてのケアリングを重視してきたのか、という問いがここで出てくる。実は、彼女はその理由を「ケアリングを美德や個人的な特性として考えてしまいがちであるから」<sup>7</sup>、と述べている。ケアリングを単に個人の性格や特性として、たとえば、このひとは「思いやりのある」ひとだ、として捉えることは、個人的な美德としてのケアリングに目が向けられ、ケアリングとケアするひととが切り離れてしまう可能性がある。それゆえ、ケアするひとをケアリングから引き離さないためにも、まずは関係性に注目することが重要なのである。

さらに、ケアリングにおける出会いには、時間や空間といった環境の要素があり、それらは、出会いの内実に影響を与える可能性がある。この前者の時間に関して、ノディングズは『学校におけるケアの挑戦』の中で見知らぬひととの短期間の出会い (brief encounter) を例に説明している。その説明では、「もし、見知らぬひとが私(ノディングズ)に道を尋ねたとき、ここではほんの僅かな時間しか共にしていなくとも、ケアリングの関係になるかもしれない」<sup>8</sup>、と述べている (( ) 内引用者)。このように彼女が説明する理由は、ほんの僅かな時間しか共にいなくとも、そこにはケアが満ちている場合があるからである。この関係においては、特に彼女が相手の要求に耳を傾け、相手がそれを受容し、承認しようとしたり、応答しようとしたりすることに注目しなくてはならない。この件については、後述するが、ここまでの議論で、ケアリングの関係になり得る出会いは、時間という要素にあまり左右されないと解することができるであろう。

さて、「出会い」の次に考察すべきは、ケアリングの関係を成立させるための要件、すなわち「貢献」についてである。ケアするひととケアされるひとが互いに貢献するとは、どのようなことをいうのであろうか。ノディングズは上述した短期間の出会いを例にあげながら貢献について述べている。この例に従えば、彼女自身が相手の話にじっくりと耳を傾けること、すなわち相手を受容することが貢献の重要な要素となる。この受容は、相手の身に自分を置くのではなく、相手のことをありのまま自分自身の中に受け容れることを意味する。こうした受容と同時に生じるのは、相手も彼女を受容し、また彼女に対して応答するということである。なぜなら、その場合の関係はケアに満ちており、それゆえ、ケアリングの関係になり得るからである。つまり、相手が彼女の親身な様子に対して「自分を受容してくれた」と感じたな

らば、その際に「ありがとう。助かったよ」と言葉を返してくるかもしれない。そして、それに加えて、相手が彼女に対して微笑みかけ喜ぶと、その姿を目にしたときの彼女は、相手と同じように喜びで満たされることになる。このような応答の存在によって、彼女は自分の行ったことが相手に受容されたことを知る。この状態は「貢献」という言葉に集約することができ、また応答は「貢献」の重要な要素となっている。

以上のように、ケアリングを成立させるためには、「出会い」と「貢献」が必要になる。この二つはケアリングの成立要件であるが、ケアリングはそれだけではなく、ケアするひととケアされるひとの意識状態にもまた特徴がみられる。そこで考えなくてはならないのは、ケアリングにおけるケアするひととケアされるひとの意識状態の特徴についてである。

## 2. ケアするひととケアされるひとの意識状態の特徴

### (1) ケアするひとの意識状態の特徴—「専心没頭」・「動機づけの転移」—

これまで考察してきたように、ノディングズのいうケアリングはケアするひととケアされるひととの関係性を指していた。また、ケアリングにおいて、ケアするひととケアされるひとの両者の関係性がケアリングの本質的な要素であった。彼女は、両者がケアリングの関係にある場合、それぞれの意識状態に特徴が見られると述べている。

ノディングズは著書『ケアリング』（1984）の中で、ケアリングにおいてケアするひとの意識状態を「専心没頭」（engrossment）と「動機づけの転移」（motivational displacement）という言葉を用いて表している。専心没頭とは、ケアされるひとへの開放的で、選り好みすることのない受け容れの状態を意味する<sup>9</sup>。また、それは完全にケアされるひとを受容する状態である。そのような専心没頭について、彼女は以下のように説明している。

根底からみれば、すべてのケアリングには、専心没頭が含まれている。専心没頭は、熱烈である必要はないし、ケアするひとの生活にみなぎっている必要もないけれども、専心没頭の状態が生じてこなければならない。<sup>10</sup>

つまり、ノディングズは、専心没頭がケアリングにおいて必要不可欠な要素であると言明しているのである。ここで、注目すべき点は、常にケアするひとが専心没頭のような意識状態にいる必要はないということ、またケアするひとになったとき、つまり、ケアするひととケアされるひととがケアリングという関係になったとき、ケアするひとに専心没頭の状態がなければならないという

ことである。

ところで、「専心没頭」の「専心」という言葉は、彼女が影響を受けたメイヤロフの著書『ケアの本質』（1971）で用いられた言葉である。この著書は1970年代に「ケアリング」が世に広がり始めるきっかけになった。メイヤロフは其中で「専心」について以下のように説明している。

専心（devotion）は、友情に不可欠な要素であるように、ケアにとって本質的なものである。私は他者に、そして大部分は見えない未来に私自身をあずける。私はケアしており、またさらに専心もしているとされるとすれば、ケアと専心は二つのものとなってしまうが、専心はそのような、あってもよいし、なくてもよい要素ではない。専心が失われれば、ケアすることは失われてしまうのである。<sup>11</sup>

すなわち、メイヤロフはケアすることと「専心」というものをほぼ同質なものとして捉え、「専心」はケアすること、ケアするひととして不可欠な特徴であると述べている。ここで留意したいのは、この「専心」とノディングズの著書「専心没頭」とは、同じ概念ではないということである<sup>12</sup>。

メイヤロフが用いた「専心」（devotion）の意味は、献身や専念、忠誠である。彼はケアすることをケアするひとの視点から見ていたのであり、それゆえ、彼の用いた「専心」は、いかにケアされるひとに自分自身を委ねるか、つまりケアするひとが相手にどれだけ献身することができるかということに重点が置かれていたことがわかる。ノディングズは、このメイヤロフの「専心」という考え方を否定するのではなく、むしろメイヤロフの「専心」概念を彼のケア論の特徴の一つとして捉えたのであろう。しかしながら、彼女はケアリング論において、このメイヤロフの「専心」という概念を用いず、「専心没頭」（engrossment）という言葉を用いたのである。ノディングズの「専心没頭」という概念は、先述したように相手をありのまま受け容れることである。ここにノディングズの「専心没頭」に込めた思いが窺われる。すなわち、「専心没頭」は「専心」と異なり、ケアされるひと個人を重んじ、ありのまま受容することである。それゆえ、彼女はメイヤロフの理論にはなかった視点、すなわち、ケアされるひとの存在や役割を重要視した「専心没頭」という概念を用いたのである。

次に考察していきたいのは、ケアするひとのもう一つの意識状態の特徴である動機づけの転移である。動機づけの転移は、私たちが動機づけるエネルギーが、他者と他者の課題に向かって流れ出すことを意味する<sup>13</sup>。たとえば、Aが突然見知らぬひとに声をかけられたとする。

そのひとは A に対して、自分の荷物を預けたロッカーの場所がわからず、荷物が手元に戻らなければ、このままでは帰宅することができない、と主張してくる。相手と出会わなければ、A はスムーズに帰宅することができたであろう。もちろん、ここで「私には関係のないこと」と相手を振り払うことも可能である。しかし、相手の話に耳を傾け、親身に話を聞くにつれ、帰宅することよりも相手の主張とその課題にエネルギーが注がれ、気づけば、A は相手とその課題を A 自身の課題と同じように捉えていた、ということもまた可能なのである。

このように、はじめは自分自身の問題や課題でなかったことが話を聞くにつれて、相手とその課題にエネルギーが注がれていくこと、すなわち、動機づけの転移を、ノディングズはケアするひとの意識状態の特徴の一つとして定義したのである。この項で述べたケアするひとの二つの特徴の根底には、相手を助けたいという強い思いや相手への共感があるように思われる。

## (2) ケアされるひとの意識状態の特徴—「受容」・「承認」・「応答」—

前項では、ケアするひとの意識状態の特徴である「専心没頭」と「動機づけの転移」について考察した。本項では、ケアするひとに対して、ケアの受け手であるケアされるひとの意識状態の特徴について、ノディングズがどのように捉えていたかということを見ていく。

ノディングズは、ケアされるひとの意識状態の特徴に、「受容」(reception)、「承認」(recognition)、「応答」(response)をあげている。彼女によれば、ケアされるひとは、ケアリングを受容し、それが受け容れられたということを示す。この承認を受け、ケアするひとは自らの専心没頭において、承認そのものを受容し、それが自分自身の一部となる。そのことによって、ケアリングが完成する、と述べている<sup>14</sup>。

彼女は『ケアリング』において、ケアリングの成立要件を以下のように示している。

1. W は X をケアする (ケアするひとに記述される条件) { W cares for X (as described in the one-caring) }
2. X は、W が X をケアしていると承認している (X recognizes that W cares for X.)<sup>15</sup>

ここで日本語訳と英文で併記したのは、この英文にケアされるひとの意識状態の特徴、特に承認が重視されていると推察されるからである。この成立要件では、W がケアするひとであり、X がケアされるひとという立場にあり、上の要件を満たしているときのみ、ケアリングの関係が成立する。ここで注目したいのは、2. の

‘recognizes’ という言葉である。彼女は、X 自身が「自分は W にケアされている」ことを承認することによって、ケアリングの関係が成立すると述べているのである。また逆にいえば、X が W にケアされているということを確認することは、W がケアしてくれたことを受容したということを表している。つまり、ケアリングにおいては、ケアされるひとによる受容と承認が重要なのである。

ここで、母親と幼児を例に応答について考えてみたい。母親と幼児の関係性は、一般的には、母親が必然的にケアするひとであり、幼児がケアされるひとである。しかしながら、幼児は母親のケアに対して、泣いたり、微笑むなどして応答する。この応答の存在は、母親自身のやりがいを感じさせる重要な要素である。

では、母親のケアに対して幼児の応答がないと仮定すると、母親の様子はどうか。母親は、幼児の様子を窺い、ときに声をかけたり、抱きかかえてみたり、微笑みかけてみる。しかし、幼児がそれらを受け容れず、母親に対して何も応答しなかったとき、母親は幼児に対する自分自身のケアが幼児によって受け容れられないことに気づく。これはケアリングが成立していない状況である。そのようなとき、母親は疲弊し、ケアするひとからケアされるひとへと変わってってしまうのである。

この例は応答が「貢献」の重要な要素の一つであることを具体的に示している。さらにいえることは、ケアされるひとの応答が、直接的にケアするひとのエネルギーへと変化し、ケアするひとのみに注がれているということである。

以上、ケアするひととケアされるひとの意識状態の特徴を叙述してきた。

## 3. ケアリングにおける「行い」と「関与」の位置づけ (1) 「行い」の様態

ケアリングを関係性として捉えることは、ノディングズのケアリング論の特徴の一つであった。ケアリングを関係性として捉えるならば、そのケアの具体的な内容について、誰かが何かをいうことやそれがケアかケアでないか、といったケアの線引きはそう問題ではない<sup>16</sup>。とはいえ、ケアリングの関係性の中で、どのようなケアがなされているか、その様態は問うべきであろう。

その問いは、ノディングズの後の著作に存在する。実は、『ケアリング』が世に出てから 18 年後、ノディングズは *Starting at home* (2002) において、ケアリングの成立要件に再度ふれているのである。

- i. A は B をケアしている—つまり、A の意識は注意や動機づけの転移によって特徴づけられる— (A cares for B— that is, A’s consciousness is characterized by attention and motivational

displacement 一)

- ii. A は i. に従って何かの行いをする。  
(A performs some act in accordance with i)
- iii. B は A が B をケアしていることを承認している。  
(B recognizes that A cares for B.)<sup>17</sup>

上記の i. から iii. では、A がケアするひと、B がケアされるひとである。注目すべき叙述は、ii. の「A は i. に従って何かの行いをする」である。A は B をケアしていること、また、A の注意や動機づけの転移といった意識状態に従って、何か行うということである。つまり、ノディングズは初期に著した『ケアリング』では言及しなかった「行い」(act) という観点をケアリングの成立要件に加えたのである。

ところで、私たちが「ケアしている」と捉えるとき、そのほとんどの場合は、目に見えるかそうでないかを判断規準にしている。たとえば、母親と幼児の関係において母親は、幼児に食事を与えたり、衣服の用意や身の回りのことの世話をする。その状態は目に見えているため、ケアを行っていると思えることができる。仮に母親本人に「あなたは幼児をケアしているか」と尋ねるならば、彼女は肯定的な答えを返してくるであろう。しかしながら、母親だからといって、常にケアをしているわけではなく、別の態度もある。たとえば、幼児が泣いていたり、悲しんでいるような様子を見せたとき、母親が幼児に対して全く関心を示す様子がないとしよう。私たちはこの母親が「ケアしている」と判断することができるであろうか。

このように、ノディングズが成立要件として加えた行いに目を向けると、ケアの行いの在り様はさまざまである。それゆえ、ケアの行いの在り様について考える必要が出てくるが、重要なのは、ケアとは目に見える行いだけを指すのではないということである。とはいえ、さまざまな関係性や状況によってケアの在り様は異なるため、その答えを明確にすることは至難の業であろう。それにもかかわらず、考慮に入れるべきは、何よりもケアとは目に見える行いだけのよう単純なものではないということである。おそらく、ケアするひととケアされるひとの関係性の中にある複雑な何かに目を向ける必要があるということであろう。

実は、ノディングズは、この目に見える行いについて、『ケアリング』の中でもいくつかの例をあげながら<sup>18</sup>、読者にケアの在り様を問いかけ、ケアリングの行いを以下のように説明していたのである。

ケアリングの行いを構成する要素を深く考察するとき、分かることは、わたしたちが観察できる行い (action) を超えて、関与 (commitment) という行

為 (acts) に目を向けなければならないということである。こうした行い (acts) は、それらを実際に行っている個々人の主観によってのみ見取られる行いなのである。<sup>19</sup>

ノディングズは、ケアリング論を議論していく際に、ケアの線引きを行う必要はなく、行いの意味について詳しく触れたわけではなかった。しかし、上述の言葉にあるように、「行い」の様態を理解するためには、「関与」ということに目を向けなければならない。

## (2) 「関与」の様態

前項で述べたように、ケアの行いに目を向けたとき、ケアの在り様はさまざまであり、それゆえ、ケアリングの行いを考察していく際には、「行い」を越えた「関与」にも目を向け、慎重に考察していくことが求められる。

さて、「関与」はどのような様態や意味をもっているのだろうか。広辞苑において関与は、ある物事に関係すること、かかわること、と定義づけられている<sup>20</sup>。ノディングズは、この関与という言葉を鍵概念として用いたわけではなく、ごく一般的な言葉として用いている。『ケアリング』において、その一般的な関与という意味でさまざまな箇所でも用いられている。そうした言葉を抽出すると、三つの場面に分けることができる。

第一の場面は、ケアされるひとのための行いに関与すること、第二の場面に、ケアされるひとの内面に関与すること、そして、第三の場面に、ケアするひと自身に関与することである。

第一の場面であるケアされるひとのための行いに関与することについて、彼女は以下のように説明している。

(ケアするひととして) わたしは行い (act) に関与しなければならない。ケアされるひとのための行いに関与すること、ふさわしい期間を通してかれの実相 (reality) に関心を持ち続けること、そして、この期間を越えて関与の仕方を絶えず更新することは、内面から見た、ケアリングの本質的な諸要素である。<sup>21</sup> (( ) 内引用者)

彼女は、ケアされるひとのための行いに対して、ケアするひとがどのような過程を経て関与していくかという点に目を向けている。このケアされるひとのための行いに関与することによって、ケアされるひとは、前述したように、ケアするひとが自分のために何らかのやり方でケアしようとしていることを受容し、承認する。そうすると、そこにケアリングが生まれていくのである。

次の第二の場面のケアされるひとの内面に関与することについては、以下のように説明されている。

ケアするひとは、ケアされるひとの安寧を願い、安寧を促進するよう行為する（あるいは、行為を控えて、内面的に関与する行いをする）。<sup>22</sup>

第一の場面での言葉にもあったように関与は、ケアリングを内面から考察する際に最も重要な要素である。ケアするひとは、ときによって行いを控え、ケアするひとの内面に関与することが求められる。どのような関与の仕方であっても、その根底には、ケアするひとのよりよい状態（well-being）を願っている、ということがこの文章から窺われる。

そして、最後の第三の場面のケアするひと自身に関与することについて、彼女は以下のように説明している。

そのように見たり感じたりするように——いいかえれば、そのようにしていると解釈される特定のしぐさを行うように——仕向けられるのではない。というのも、わたしは、他のひとと共に見たり感じたりすることをわたしにさせてくれる受容性に関与しているからである。<sup>23</sup>

ケアリングにおいて、ケアするひとがケアするとき、意識状態は専心没頭の状態になるということは先述した通りであるが、その際にケアするひとは、相手のありのままを受け容れ、相手の話に耳を傾けたり、自分のことのように感じたりしようとする。しかし、それは決して強いられているわけではない。なぜなら、ケアするひとがケアされるひとにケアしつつ、実は自分自身の受容性に関与しているからである。自分自身の受容性に関与できず、「わたしは目の前のひとのためにケアしている」と思ってしまえば、それは逆にケアの関心が自分自身に向いているということになる。それゆえ、それはケアしていることにはならない。ケアするひとの行いが真に「ケアしている」と客観的にいえるためには、ケアするひとが自分自身に関与しているという様態があると考えられる。

#### —注—

- 1 新村出編『広辞苑』第六版 岩波書店、2008、p. 853.
- 2 Nel Noddings, *The challenge to care in schools; an alternative approach to education*, Teachers College, Columbia University, 1992, p. xi. (佐藤学監訳『学校におけるケアの挑戦 もう一つの教育を求めて』ゆみる出版、2007、p. 11.)
- 3 *ibid.* (同上)  
本研究ノートで用いたノディングズの引用文は、翻訳

#### おわりに

以上、本研究ノートでは、ネル・ノディングズのケアリング論におけるケアリングの成立要件とケアするひととケアされるひと各々にみられる意識状態の特徴を述べてきた。ケアリングにおけるこれらの成立要件や各々の意識状態がケアリングの関係性において十分満たされたときこそ、ケアリングが本当の意味で成立するということなのである。本研究ノートで明らかにしようとしたのは、そうしたケアリングの内実から窺い知ることのできるケアリングのダイナミズムである。

しかし、内面からみたケアリングとして重要な要素である関与について深く言及できなかったことは課題として残されている。ケアするということは、先述したような受容や承認といった綺麗な言葉では片付かないような部分も含んでいる。たとえば、ケアするひととケアされるひととの要求の違いから生じる「葛藤」、ケアするひとが感じる「責務」といったような要素を含んでいるという側面もある。

こうしたことを考えていくためにも、ケアの行為である行いという点に目を向けたときに浮き彫りとなる問題、すなわち、目に見える行いとそれを越えるケアリングの内面にアプローチする関与といった二つの観点へのさらなる考察が不可欠である。なぜなら、こうしたケアリングの内面に踏み込むことは、私たち人間が生きていく上で避けて通ることができないケアリングの意味内容を深く明察することにつながるからである。

#### 謝辞

本研究ノートは、筆者が学部の3年次生のときから取り組んでいるケアリング論の一部をまとめたものである。約4年の期間をかけて、ようやく一つの研究ノートにまとめることができた。

本研究ノートを執筆するにあたり、ご多忙にもかかわらず親身にご指導してくださった山崎洋子先生、田中毎実先生、佐藤幸治先生、鶴宏史先生など、お名前をあげればきりが無いが、多くの先生方の協力を得て執筆できたことに対して、この場を借りて厚く御礼申し上げたい。

- 本を参考に原典に基づいて筆者が訳した。注では、原典の頁数を書き、( )に翻訳本の頁数を併記した。
- 4 *ibid.*, p. 15. (同上書, p. 42.)
  - 5 人を表す言葉には、「人」や「者」といった言葉があるが、本研究ノートでは、日本特有の言葉である平仮名の「ひと」を用いることとする。
  - 6 「ケアするひと」の原典の表記には、‘one-caring’や‘carer’があるが、本研究ノートでは、前者の言葉を

- 統一して表現する。
- 7 *ibid.*, p. 17. (同上書, p. 47.)
- 8 *ibid.*, p. 16. (同上書, p. 44.)
- 9 *ibid.*, p. 15. (同上書, p. 43.)
- 10 Nel Noddings, *Caring: a feminine approach to ethics and moral education*, University of California Press, 1984, p. 17. (立山善康・林泰成・清水重樹・宮崎宏志・新茂之訳『ケアリング 倫理と道德の教育—女性の視点から』晃洋書房, 1997, p. 27.)
- 11 Milton Mayeroff, *On Caring*, Harper Perennial, 1971, p. 10. (田村真・向野宣之訳『ケアの本質—生きることの意味』ゆみる出版, 1987, p. 24.)
- 12 この点に関して, 柏木恭典・上野正道・藤井佳世・村山拓『学校という対話空間—その過去・現在・未来—』で触れられているが, 考察には至っていない。
- 13 Nel Noddings, 1992, p. 16. (前掲書, p. 44.)
- 14 *ibid.*, p. 16. (同上書, p. 45.)
- 15 Nel Noddings, 1984, p. 69. (前掲書, p. 109.)
- 16 この解釈については, 倫理上の問題の有無があるが, ここでは立ち入らないこととする。
- 17 Nel Noddings, *Starting at home: caring and social policy*, University of California Press, 2002, p. 19.
- 18 Nel Noddings, 1984, pp. 10-11. (前掲書, pp. 15-17.)
- 19 *ibid.*, p. 10. (同上書, p. 16.)
- 20 新村出編『広辞苑』第六版 岩波書店, 2008, p. 651.
- 21 Nel Noddings, 1984, p. 16. (前掲書, p. 25.)
- 22 *ibid.*, p. 24. (同上書, p. 39.)
- 23 *ibid.*, p. 30. (同上書, pp. 46-47.)